

モデル実験による集合内の服装の場違い感；日韓比較の場合

○内田直子 小林茂雄* 長倉康彦

(*共立女大)

目的 第49回、第50回の本大会で、人々の集まりにおいて、服装が場の雰囲気到场違いと感じるかどうかを人形モデル実験によって検討し、報告した。これまでは、日本の服装による日本人の場違い感のみについて検討してきたが、果たして異国ではこの「場違い」という感情はあるのかどうか、また異国の服装との集まりの中では、場違い感はどのようになるのかなどを、隣国の韓国を対象として比較研究を行った。

方法 前回の報告と同様、2種類の服装S1、服装S2で構成する人形36体を3.24m²のスペース上にランダムに配置して人の集合モデルをつくり、この2種類の服装の着装比率を変えながらスライド撮影し、それを提示して場違い感の評価実験を実施した。この場合、集合だけの効果をみるために、無背景であるグレーの空間を設定した。服装の種類は日韓比較のために代表的な民族衣装の「着物」「韓服(チマ・チョゴリ)」を用い、他に日常的な「紺スーツ」「ジーンズ」の4種類とした。実験は、日本人の女子大学生99名を対象に平成12年7月に実施し、韓国人の女子大学生67名を対象に同年9月に実施した。

結果 今までの先行研究と同様、今回の日韓両者とも、集合の中で自分と同様の服装が増加すると、その場違い感は減少しており、「場違い感」とは、日本人の感情だけのものではないことがいえる。ただし、今回の実験では全体的に韓国人のほうの場違い感はやや低い結果となった。これは、個々の服装に対するイメージが両国の間で相違しているところがあり、そのため、集合内の2種の服装間のイメージの格差が両国で異なり、今回の場違い感の日韓の差となっていると考えられる。